

彙報

昭和三十三年

国文学科卒業論文題目

西鶴の階級観

石橋 慶子

徒然草研究

—徒然草の自由性について—

梅田 純子

上代における「に」助詞の用法

江口アイ子

源氏物語に現れた親子像

江藤 正子

一茶研究

—心境の変化を中心として—

大串 恭子

大庭 文子

御伽草子について

—その闘争の場について—

落合 博子

大鏡の研究

岸川 郁子

連歌の本意について

与謝蕪村研究

藏原 廸子

—狐狸趣味を中心として—

齋田 節子

齋藤 欣子

芥川龍之介における批判的意識

佐野 正子

西鶴の遊里における人間像

島本佐恵子

戸田茂睡歌論の研究

調 睦子

女房 詞

—御湯殿の上の日記における—

妹尾 静子

川端康成研究

高田 道子

大伴坂上郎女の研究

滝 早苗

西鶴の文章

—好色一代男を中心に—

竹内 廸子

平家物語における永遠なもの

田尻 幸子

明暗について

田中美津子

西鶴と復讐説話

田中 保子

芭蕉の俳論について

富田 規子

西鶴の描いた町人の自我について

内藤 安恵

近松の修辭にあらわれた聴覚性

中野 道子

正宗白鳥のニヒリズムについて

成富美美子

源氏物語と倫理

西見 好子

三代集に於ける万葉歌の研究

—古今集を中心に—

原 直子

「恋路ゆかしき大将」の研究 平島 良子

古事記に於ける比喩について

前田 典子

—分類を中心として—

島崎藤村の「春」

森崎 福恵

歌論史上における山部赤人について

守田 哲子

志賀文学における「山科もの」の

位置について

安川 利子

万葉集における語彙表記

安田 厚子

あさぢが露の研究

安永 悦子

夜半の寢覚研究

山下 昭代

助詞「を」の研究

芳野 孝子

坪田譲治研究

—児童文学のリアリズム—

加来 和子

源氏物語における容貌の表現

河波 節子

有島武郎研究

野村 絢子

昭和三十三年
国文学科講義題目

国文学

古事記講読

倉野 教授

平家物語講読

井手 教授

日本文芸史

井手 教授

源氏物語講読

目加田 教授

書 道

小森 講師

昇任・新任

枕草子講読

目加田 教授

近世初期文芸の諸問題

松田 助教授

曾根崎心中講読

松田 助教授

世間胸算用講読

松田 助教授

国文学特講

倉野 教授

伊勢物語

倉野 教授

平仲物語

目加田 教授

国文学演習

倉野 教授

万葉集 卷十一

井手 教授

徒然草

井手 教授

国語学

古田 助教授

国語史概説

古田 助教授

国語学特講

古田 助教授

日本文法の研究

古田 助教授

国語学演習

古田 助教授

土佐日記

古田 助教授

言語学概論

北西 講師

中国文学

小西 講師

中国古典

米田 教授

論語孟子

米田 教授

諸子文粹

米田 教授

日本史

竹内 講師

東洋史

日野 講師

特別研究指導

倉野 教授
井手 教授
目加田 教授
古田 助教授
松田 助教授

北西教授退職、本学名誉教授に

旧女専以来二十余年間、本学国文学科のために尽くされた北西鶴太郎教授は、一身上の御都合により、三月三十一日付で依願退職され、四月から新設の香蘭女子短大教授に転ぜられたが、本学にも非常勤講師として出講されている。なお、長年本学のために尽くされた功績により、七月一日付で本学名誉教授の称号を授与された。

文学部長に倉野教授再選

文学部長任期満了に伴い、選挙の結果、倉野教授が再選され、四月一日付で発令された。

国文学科主任に井手教授

北西教授退職に伴い、井手教授が国文学科主任に互選された。

目加田さくを助教授 本年七月一日付で教授に昇任された。
松田 修氏 本年四月一日付で助教授として新任された。

福岡女子大学国文学会
第三回 総会

国文学会第三回総会は、五月十八日(日)午前十時から、樟の若葉薫る太宰府天満宮文書館で行われた。倉野会長の挨拶について井手教授を議長に推し、とくに今回は規約の一部改正して、本学会に顧問をおくことを可決、倉野会長より、北西名誉教授を顧問に推すことを提案、満場一致でこれを決定した。

福岡女子大学国文学会
第三回 公開講演会

本学会主催の恒例の公開講演会は、総会終了後、引続いて天満宮文書館で開催され、左の様に両教授の興味あふれる講演があつて、聴衆に多大の感銘を与えた。なお、地元太宰府町からも多数の来聴者があ

り、盛況であつた。

天才論について

九大文学部教授 小林栄三郎氏
美の理論と中世文芸

福岡女大文学部教授 井手 恒雄氏

香椎瀧 発行

福岡女子大学国文学会機関誌「香椎瀧」は、昨年十二月に第三号、本年七月に第四号が発行された。(希望者には送料共実費百円で頒布)

編著書・論文

(三二・四―三三・九)

教授 倉野 憲司

1 古事記大成、第六卷、本文篇 一冊
平凡社刊

2 日本古典文学大系、第一巻、古事記祝詞 一冊 岩波書店刊(祝詞は武田祐吉氏校注)

3 国文学研究書目解題 一冊(麻生磯次編、至文堂刊)中の左記項目について執筆

松岡静雄「記紀論究」、植松茂「古

事記漢字索引」、古事記学会編「古事

記年報(一)」、石井庄司「古典考究、記

紀篇」、武田祐吉「古事記説話群の研究」、同「古事記研究、帝紀攷」、井

上頼因「古事記考」、富士谷御杖「古事記燈」、山田孝雄「古事記上巻講義

一」、中島悦次「古事記評釈」、次田潤「古事記新講」、敷田年治「古事記

標注」、吉岡徳明「古事記伝略」、本

居宣長「古事記伝」、田安宗武「古事記詳説」、荷田春満「古事記割記」、

ト部兼文「古事記裏書」、植木直一郎「日本古典研究」

4 読み易い文章(日本談義、第七十八号)

5 琴歌譜序私注(文学・語学、第四号)

6 国語教育の基本(佐賀県国語教育学会誌、創刊号)

7 時枝博士の「言語における伝言者の立場について」に関する疑(国語学、第三十輯)

8 皇典文彙と櫛田駿(文芸と思想、第十四号)

9 再び「皇典文彙と櫛田駿」について

(香椎瀧、第三号)

10 天石屋の神話について(瑞垣、第三十五号)

11 「大君は神にしませば」の歌について(明日香路、第十巻第二号)

教授 井手 恒雄

1 あはれの文学(角川書店・日本古典鑑賞講座『平家物語』所収)

2 無常観の克服(文芸と思想、第十四号)

3 かへりみ思ふ心(香椎瀧、第三号)

4 心敬と自然美(語文研究、第五号)

5 幽玄美再考(香椎瀧、第四号)

教授 目加田さくを

1 平仲物語新講 一冊 武藏野書院刊

2 平仲物語論 一冊 武藏野書院刊

3 自我に反撥するもの―清女の場合と紫女の場合―(平安文学研究、第十九輯)

4 乞食之客―古今集真名序考―(平安文学研究、第二十一輯)

5 二代目の設定―源氏物語寛書―(平安文学研究、第二十二輯)

6 源氏物語論攷―紫式部の姫君形成(一)―(文芸と思想、第十四号)

7 清少納言の劣等意識表現(香椎瀧、第三号)

助教授 古田 東朔

1 文部省国語課編国語シリーズ36、教科書から見た明治初期の言語・文字の教育一冊 光風出版刊

2 代名詞遠称「あ」系語と「か」系語の差異(文芸と思想、第十四号)

3 福沢諭吉 ―その国語観と国語教育観― (実践国語、三二年十一月号)

4 学制当初における文法科(中) ―表現文法の意図と品詞論の問題― (愛媛国語研究会・国語研究、第二十六号)

5 洋文典における品詞訳語の変遷と固定(香椎瀧、第三号)

6 明治初期小学読本編集史稿(内)(愛媛国語研究会・国語研究、第二十八号)

7 明治以後最初に公刊された洋風日本文典―古川正雄著『入智恵の環』について― (香椎瀧、第四号)

助教授 松田 修

1 「竹斎」の成立 ―仮名草子の時好性― (国語国文、三二年三月号)

2 異端の系譜 ―秀吉かぶきから山三か

ぶきへ―(間「伝統演劇」、第七号)

3 「浮世物語」の挫折 ―仮名草子における批判的リアリズム― (国語国文、三二年五月号)

4 仮名草子と西鶴(解釈と鑑賞、三二年六月号)

5 太閤伝説の形成 ―英雄流離譚の形成― (文学、三二年七月号)

6 仮名草子作者小考
一、浅井了意二人説の根拠
一、「悔草」の作者

(大阪成蹊女子短期大学紀要、創刊号)
7 八日本文学の理想像V 好色一代男(日本文学、三三年七月号)

8 「日光山紀行」の作者 ―烏丸光広著作考― (香椎瀧、第四号)

9 読本の流れ(角川書店・日本古典鑑賞講座「秋成」所収)

10 荻萱桑門筑紫蝶(伝統演劇、第二一号) 助手 前田 淑

1 「梅花歌」序の成立と作者 ―吉田宜の書簡を中心に― (文芸と思想、第十四号)

2 万葉集にみえる老岐の国司(老岐の島

第十三号)

3 「日本振袖始」の一素材(香椎瀧、第三号)

4 室町時代の博多 ―宗祇の「筑紫道記」より― (那の津、第五号)

国文学研究室

受贈図書雑誌

(三二・五・三〇) 三三・九・一六

単行本

新設柿句集(秋)

設柿社

同 (冬、新年)

同

同 (鑑賞編)

同

中山高陽紀行集(清水孝之編)

高知女子大学

雑誌

肇国 四、五、六、盛夏、九、十、一、二

四、五月号

肇国神祇聯盟

国語研究 第六号、第七号

国学院大学国語研究会

国文学 第十七号、第二十二号

関西大学国文学会

国文学攷 第十七号、第十九号

広島大学国語国文学会

設柿 昭和32年6月号、昭和33年9月号

渋 柿 社

人文科学科紀要 第13輯

甲南国文 創刊号、第2号

東方古代研究 第八号 東方古代研究会

東京大学教養学部人文科学科

甲南女子短期大学国語国文学会

愛媛国文研究 第6号、第7号

国文学研究 第十六輯

研究 第十五号 神戸大学文学会

愛媛国語国文学会

早稲田大学国文学会

大学紀要 第一輯、第二輯 和洋女子大学

中国文芸座談会ノート No.10

聖心女子大学論叢 第10集、第11集

方言研究年報 第一卷 藤原 与一氏

九大中国文学研究会

聖心女子大学

佐賀龍谷短期大学

文学論藻 第七号、第九号、第十一号

檀蔭文学 第九号

大阪檀蔭女子大学

研究紀要 第8集 広島女子短期大学

東洋大学国語国文学会

女子大國文 第七号、第九号

京都女子大学国文学会

説林 I、II 愛知県立女子大学国文学会

紀 要 II

北星学園女子短期大学

京都市女子大学国文学会

語 文 第五輯 日本大学国文学会

法文論叢 第九号 熊本大学法文学会

日本文学 九月号

日本文学協会

学大國文 創刊号 大阪学芸大学

成城文芸 第十号、第十四号

明治大学日本文学紀要 第一号

明治大学日本文学会

成城大学文芸学部研究室

平安朝文学研究 第二号

教育研究 IV 国際基督教大学教育研究所

高知女子大学紀要 第五卷第一号

早稲田大学平安朝文学研究会

人文研究 第9卷第2号、第7号

高知女子大学

研究年報 第五号 帝塚山学院短期大学

日本文学 第十号 大阪市立大学文学会

山辺道 第三号 天理大学国文学研究室

国文研究 第三号 熊本女子大学国文研究部

東京女子大学日本文学研究会

北海道大学文学部紀要 6

文芸研究 第五号 明治大学文芸研究会

愛知大学文学論叢 第十五輯、第十六輯

北海道大学文学部

清心国文 第一号

愛知大学文学会

国文 第七号、第九号

ノートルダム清心女子大学

愛知大学文学会

お茶の水女子大学国語国文学会

国文学研究室

金沢大学法文学部論集 5

和歌文学研究 第四号、第六号 和歌文学会

明治大学短期大学紀要 2

明治大学短期大学

語文研究 第六・七号 九州大学国文学会

清泉女子大学紀要 4、5 清泉女子大学

明治大学短期大学紀要 2

明治大学短期大学

文学論輯 第五号 九州大学教養部

音声学会会報 第94号、第96号

日本音声学会

中央大学国文 創刊号

日本音声学会

日本文学誌要 No.1

法政大学国文学会

中央大学国文 創刊号

実践女子大学紀要 第五集 実践女子大学

紀 要 第8輯

愛知県立女子大学

中央大学国文学研究室

紀要 第一号 共立女子大学短期大学部
書陵部紀要 第2号(第9号)

宮内庁書陵部

国語国文学会誌 第2号

学習院大学国語国文学会

研究論集 第五卷第一号

相愛女子大学

実践文学 第四号

実践女子大学

那の津 5、6

福岡市職員課

名古屋大学文学部研究論集XX、XX、XXI

名古屋大学文学部

試論 3

武蔵野文学会

武蔵大学論集 第五卷第二号、第六卷

第一号、第二号

武蔵大学学会

文学部論叢 第9号

立正大学文学部

高知女子大学紀要 第六卷第二号

高知女子大学

文理論叢 第三卷第一号

福岡大学研究所

抜刷

山崎良幸・日本語の動詞と形容詞について

(高知女子大学紀要第五卷第一号)

山崎 良幸氏

山崎良幸・詞と辞の接続における意味的関

係(高知女子大学紀要第二卷第一号)

山崎 良幸氏

山崎良幸・「何にせむ」について(高知女子
大学紀要第二卷第二号)

山崎 良幸氏

山崎良幸・言語表現の曖昧性と文学表現

(高知女子大学紀要第一卷)

山崎 良幸氏

松村誠一・堤中納言物語伝本考(四)(高

知大学学術研究報告第五卷第三〇号)

高知大学

小関清明・鹿持雅澄雑考(高知大学学術研

究報告第五卷第二四号)

高知大学

西尾光雄・サ変動詞「す・する」の補助的

用法(東京都立大学人文学会「人文学

会」第十七号)

東京都立大学人文学会

山崎良幸・活用現象は何を表現するか(高

知女子大学紀要第六卷第二号)

山崎 良幸氏

編集後記

ここに『文芸と思想』第十六号を送る。
例年、この偶数号は、七月初めに発行し
てゐたのであるが、今回は、特に、種々の
都合から遅らせることとなり、この十月発
行となつた。この点、読者諸賢の御諒恕を
お願いする。

しかし、一方、例年と違つた編集である
ことにも御注意頂ければ幸ひである。本号
では、例年のやうに、各人の枚数の差はな
く、全員ほぼ等しい分量を担当するととも
に、別に第十四号では休んでゐた翻刻もつ
け加へることとした。発行が遅れはした
が、それなりに、私どもとしては内容充実
への努力を怠らなかつた積りではある。論
文の内容への厳正な御批判を期待するもの
である。

来年は、本学も開学十週年を迎へる。本
学文学部の研究発表機関である本誌のより
一層の充実と発展のため、今後努めてい
きたいと思つてゐる。切に御支援をお願い
する次第である。

(古田)